東京・隅田川があふれた明治 29年大水害

1896(明治 29) 年 9 月 10日、マリアナ諸島から 北西進してきた台風は、奄美諸島付近で向きを北 東に転じた。台風は 11日鹿児島県大隅半島から四 国沖に進み、 11日夜紀伊半島に上陸し、 12日朝佐 渡付近に達した。なお、 9 月 6 日にも別の台風が 紀伊半島に上陸した。

東京の天気は次のとおり(括弧内は日雨量[ミリ])。8日暴風雨(8)、9日雨(17)、10日大雨(28)、11日暴風雨(14)、12日暴風雨(16)、13~14日曇り、15日大雨(51)、16日大雨(55)。この大雨のため、荒川、利根川、多摩川など東京市内の河川はいずれも増水し、大きな被害をだした。

荒川は戸田橋辺りの水位が9日昼に平水より1 丈2尺(3.6m)、10日午前5時には5.4m、11日午 前5時には6.5mと急激に増えた。11日には志村付 近で45戸、岩淵町で243戸、王子町内で231戸、千 住辺りで136戸、田畑120町歩が浸水して、本所区、 浅草区の一部も浸水した。

利根川も増水し、鬼怒川が合流した辺りで、利根川の水が利根運河を逆流して江戸川に入った。 江戸川は 11日午後 8 時に宝珠花の量水標が 5 mに達し、12日午前 11時に三輪野江村の深井新田先で堤防が決壊、埼玉県の庄内古川も破堤し、13日午後 11時には北埼玉郡八木郷村の小向堤防が破れた。このため中川が大増水して15日午前 1 時には南葛飾郡新宿町で堤防 2 か所、同日午後 5 時前後には奥戸新田の塩入堤防が、また東京への関門である花畑村の六ツ木入堰が16日午前 0 時にそれぞれ破れた。

隅田川の堤防から水があふれて、水は柳島方面へ押し寄せて、押上の堤を2尺も越えた。押上1丁目から新小梅町方面は水浸しとなり、向島須崎から中ノ郷を経て押上までは浸水家屋が1,330戸、押上から柳島、大平町辺りは1,924戸、柳島本町と同横川町は136戸浸水し、ところによっては床上2尺に達した。

この洪水では、本所を中心に浸水し、府と警視 庁は救助に全力をあげた。本所区内で救助された 人は1,700余人にのぼった。避難者は表町の明徳 学校、須崎町の牛島学校、中ノ郷業平町の真正寺 などに収容され、炊出しをもらった。被害は特に 区内北部で大きく、18日夜水深5尺(1.5m)に達 し、最悪となった。浸水は10余日に及び、27日に なってようやくすべての水が引いた。

『大洪水の図』は明治 29年 9月 28日印刷、10月 1日出版とある。右上の説明文の概要は、「明治 29年 9月の府下の水害は、中川筋の堤防が決壊して向島一円本所の一部が一面の大洪水となった。昨日までの青田は今日は大湖のようになり舟で往来した。府庁および各警察署から巡査が出張し防御し人民を救助するなどの尽力が実った。50余年来の大洪水には驚くばかりである。」

また、朝日新聞(9月22日付)の記事に「小梅 瓦町14番先の濁流は非常な勢いの奔流で、戸板も しくはいかだで流れ来るものを救助した。そのた めに、昼夜の別なくサーベルをつけた巡査が詰め 切り、昨日までに誤って川中に流れ込まんとした 者を救助したる数36名。また同地の米商宮川兵助 は長さ3間ぐらいの竹に鉤(かぎ)をつけ、流れ る者を引き寄せて救い上げた。その数20余名の多 きに達せり、奇特と言うべし」とある。

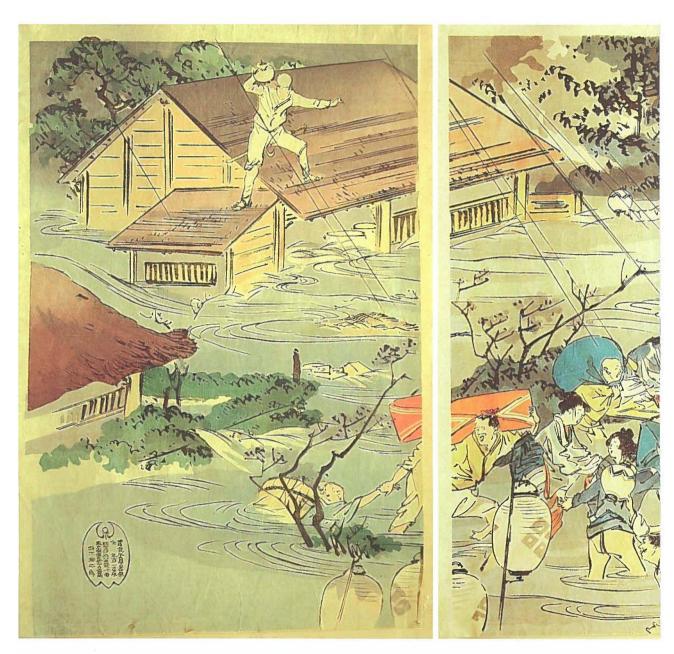
絵図に描かれている三囲(みめぐり)神社(現・墨田区向島2-5)は隅田川の言問橋のすぐ北、川の東側の土手下にある。400年近い歴史があり、神社の別殿には古くから大黒・恵比寿の2神の神像が奉安されている。「三圍社」の扁額をかかげた鳥居(石造り)には慶応2年(1866)2月初午と彫ってある。神社は現在では隅田川七福神めぐりの出発点である。

明治 29年の水害は、東京の明治三大水害の一つで、同 43年の大水災に次ぐものである。それにしても明治 29年は災害が多く、6月 15日に明治三陸地震津波、7月下旬に新潟・北信の大洪水(横田切れ)と続いた。

「参考文献]

- ・畑市次郎 東京災害史,1952都政通信社同誌編纂委員会
- ・荒川下流誌 / 本編,2005,(財)リバーフロント整備 センター
- ・中央気象台年報[第2編]暴風雨の部,1896年,

宮澤清治(元神戸海洋気象台長/元本誌編集委員)



大洪水之図(25×38cm、3枚、防災専門図書館蔵)



